2018年10月28日　中野教会・聖書の学び

　　　　　　　　　**「あなたの王があなたのところに来られる」**

聖書箇所：ゼカリヤ書1:1-6、9:9-10、12:12-14、14:21

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日はゼカリヤ書からです。4箇所読みました。ゼカリヤ書は複数の人物によって書かれたのではないか、と言われている文書ですが、それぞれ第一ゼカリヤ、第二ゼカリヤ、第三ゼカリヤの記述と言われていますがその第一と第二のところから一か所づつと、第三から2個所をとりあげました。これらの箇所の理解に重点をおきながらも、ゼカリヤ書全体を見ながらお話しをいたします。

　例によって、時代背景をご説明いたします。時期的にはゼカリヤ書の直前のハガイ書とほぼ重なっています。ハガイ書がBC520年頃と推測されるのに対し、ゼカリヤ書はBC519年以降と推察されています。そのころの時代背景を簡単に復習致します。出発点はバビロン捕囚です。BC587年に南王国ユダが新バビロニア帝国によって滅ぼされます。その前後3回にわたってユダ王国の指導者たちはバビロニアの首都バビロンにつれて行かれました。これをバビロン捕囚と言います。その後BC539年、バビロニアはペルシャによって滅ぼされます。ペルシャは宗教的には寛容策をとり、キュロス王はユダヤ人に対し、エルサレムへの帰還許可を与えます。これに答え、一部のユダヤ人はエルサレムに戻り、神殿再建にとりかかりましたが、反対にあいこの事業はとん挫します。しかしBC520年頃、神殿工事再開の機運が高まり、総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアの指導の下でBC515年遂に完成いたしました。これが第二神殿と言われるものです。ハガイ、ゼカリヤ両預言者はこの工事を励ました人々でした。第一ゼカリヤ書は神殿再建工事完了直前にまとめられたもの、と思われます。第二、第三ザカリヤについては諸説あります。最も時代が下った説としてはBC2cのシリア支配の時代と言う説もありますが、アレクサンダー大王の時代からプトレマイオス朝が安定した支配を確立するまでの所謂ギリシャ時代の文書とするのが説得性があります。BC4ｃ半ばです。

これとの関連で著作年代を推定するにあたって、事後預言か将来預言なのか、という聖書解釈上の根本問題があります。それは、エゼキエル書、ダニエル書、ゼカリヤ書等黙示文書といわれる預言書の解釈に当たって、歴史的発生事実が発生して後に、これを想定し預言していると考えるのか、将来の出来事を神様が事前に知らせている、と考えるか、です。現代批評学の学者は基本的には事後預言だとして著作年代をその歴史的事実が発生したのち、と解釈します。これに対し聖書主義の学者たちは神様が事前に将来発生することについてあらかじめ伝えているのだ、という立場をとります。このため著作年代はその文書に描かれている時代から遠くない時期と考えます。私は事後預言としか解釈できない程に歴史的事実の描写があれば事後預言と解釈しますが、原則としては福音派（聖書主義）の解釈に賛成です。できる限り聖書の言葉を文字通りに理解すべきである、との考えからです。その意味で、第二、第三ゼカリヤの記述も、どうしてもそのBC2cのマカベア朝時代の歴史的事実を踏まえなければ預言できない、というものではありません。従って、ギリシャ時代説が妥当と考えるものです。但し、同一人物とは考えにくいです。ダニエル書の場合、ダニエル書を保存し追加記述をしていた集団が存在した、と考えられていますがゼカリヤ書においても同様なことが考えられます。黙示文書を叙述し続けていた集団が存在した、と考えるのです。イザヤ書24-27章は「イザヤの黙示録」と称されており、第一イザヤの時代から黙示の伝統は有ったと思われます。

BC516年に神殿はなんとか完成したのですが、老人はソロモンの神殿の方がずっと素晴らしい、と言って再建神殿をばかにした、と言われています。その後、紆余曲折を経て神殿城壁の建設をし、BC438年になんとか完成にこぎつけました。この再建神殿はBC63ローマのポンペイウスによって破壊され、その後、ヘロデ大王の再々建・増築を経て、AD70年のローマによるエルサレム破滅時に最終的に壊滅します。マサダの砦で、壮烈な集団自殺が発生した時です。ヘロデ王の神殿を第三神殿ということもあります。「嘆きの壁」と言われているのはこの第三神殿の城壁の一部です。

ゼカリヤという名前は「za:kar」という「思い出す、記憶する」という単語の変化形と「ya:」という「yahawe」「神、主」という単語の組み合わせであり、「主が彼に目をとめた」という意味となります。旧約聖書にはこの名前が多数現れます。31名いると言われています。ゼカリヤの名前で有名な人物としては北王国14代目の王ゼカリヤがいます。この王は北王国が盛んであったイエフ王朝の最後の王です。暗殺され、6か月しか王でありませんでした。その他にも南王国8代目のヨアシュ王の先生・祭司エホヤダの子ゼカリヤという人物がいます。このゼカリヤは陰謀によってヨアシュ王に殺されます。マタイ12:35やルカ11:50でイエス様がこのザカリヤの名を上げています。ルカの方のみお読みいたします。「それは、アベルの血から、祭壇と神の家との間で殺されたザカリヤの血に至るまでの、世の初めから流されたすべての預言者の血の責任を、この時代が問われるためである。そうだ。わたしは言う。この時代はその責任を問われる。』」とあります。創世記でカインに殺されたアベルからユダ王ヨアシュによって殺されたザカリヤまでの預言者の血、と言われています。ゼカリヤ書のゼカリヤも同様に悲劇的最後を遂げた可能性は十分あります。

1:1に「イドの子ベレクヤの子、預言者ゼカリヤ」とありますが、エズラ記5:1では「イドの子ゼカリヤ」となっています。おそらくイド、ベレクヤ、ゼカリヤの順なのでしょうがエズラ記では一代省略して「子」と言っているのだと思われます。旧約では子、孫、曾孫などが厳密には区別されていません。ハガイと同時期の預言者ですが、おそらくゼカリヤはハガイの後輩といったところではないか、と想像されます。

2節に主はゼカリヤの先祖たちを激しく怒られた、とあります。この部分はヘブル語では「怒りを怒る」と書かれており「qa:tsaf」という「怒る」という言葉の強調となっています。そのため新改訳では「激しく怒られた」と訳されています。神殿再建が順調にいかず中断されたことが背景にある、と思われます。ゼカリヤ達はバビロンから帰還した人々ですが、エルサレムの地に残った者達はハガイ達の神殿再建の声に応じず非協力的態度をとったことを指して、主なる神の怒りが爆発した、というのです。3節がポイントです。「あなたは、彼らに言え。万軍の主はこう仰せられる。わたしに帰れ。－－万軍の主の御告げ－－そうすれば、わたしもあなたがたに帰る、と万軍の主は仰せられる」と言います。「わたしに帰れ」の「帰れ」はヘブル語の「shu:b」であり。新約の用語では「悔い改めよ」に該当します。神の恵みから遠ざかり自分の力により頼んでいることをやめ、神の元に帰れ、と言われています。もし、こうなれば神様も人々の元に帰って来る、といわれています。前者の人が神に立ち帰るのは「shu:b」の通常の使い方ですが、神が人に立ち帰る、という言い方は例外的です。イスラエルの神は人が立ち帰るのに対し応答される神である、ということを強調するためと思われます。神様の方からいらっしゃるというのは神の恵みの現れです。福音書における放蕩息子の話のなかで最後の場面で「父親は---走り寄って彼を抱き」とあります。同じ意味と考えられます。4節に「悪の道から立ち帰り、---悪いわざを悔い改めよ」と出てきますが、この「立ち返り」と「悔い改めよ」は原文では同一の単語であり、「shu:b」です。実はこの言葉「shu:b」がゼカリヤ書だけでなんと17回も使われています。1:6の「立ち返って」、1:16の主がエルサレムに「帰る」、4:1の御使いが「戻ってきて」などなどです。1:1-6の部分は「悔い改めの勧告」と称せられている箇所ですので「shu:b」が多く出てくるのは解るのですがこの言葉がゼカリヤ書全体に使用されている、ということはこれからのゼカリヤの預言においても我々に悔い改めを迫る神の意志が存在する、と考えるべきでしょう。私たちは主なる神に立ち帰り、自分の中に祈りの神殿を築かねばならないのだと思います。

ここで「悔い改め」という言葉を掘り下げてみます。まず、「悔い改める」という新約での言葉はギリシャ語では「metanoe:wo」という言葉ですが、旧約聖書ギリシャ語訳である七十人訳でこの「metanoe:wo」系の単語が使用されている箇所のヘブル語をみると、「戻る、立ち返る、思い直す」という意味の「shu:b」と「慰める、悔いる」等多様な意味をもつ「na:ham」という単語の2種類があります。「shu:b」が圧倒的に多いのですが「na:ham」もかなりあります。この箇所の新改訳は「悔いる、悔い改める」です。また、新約聖書のヘブル語訳というのがありますが、そこでギリシャ語「metanoe:wo」系の単語に対応するヘブル語を見ると、やはり「shu:b」と「na:ham」があります。「shu:b」が主ですが「na:ham」もあります。あの有名な「悔い改めて福音を信ぜよ」の悔い改め、は「shu:b」です。「shu:b」には日本語の「悔い改め」の「改める」意味はありますが「悔いる」の意味は全くありません。むしろ「神に立ち帰り、福音を信ぜよ」と言う方が真実かもしれません。ではどうして、このように二つのかなり異なる意味のヘブル語が、新約の時代に「metanoe:wo」「悔い改める」になったのでしょう。私が調べた限りではつぎのような事情が推測されます。カナンの地ではBC2c以降日常用語として、アッシリアやシリヤの言葉であるアラム語がつかわれていた、と推測されています。旧約聖書のアラム語訳のことをタルグムと言います。実は、先程のヘブル語で「shu:b」と「na:ham」の両方がタルグムでは「tu:b」という言葉になっています。「tu:b」はヘブル語「shu:b」と同じ系統の言葉と想像されますが「na:ham」の意味も吸収し、「悔いる」の意味も併せ持つようになっています。アラム語の「na:ham」は「騒ぐ」という全然違う意味の言葉です。アラム語がカナンの地に定着するなかでヘブル語の「na:ham」がアラム語「tu:b」に吸収されたのだと思います。ここで重要なのは、新約聖書で「悔い改め」と言う時、多くの場合は「悔いる」とは無関係な「神に立ち帰る」という意味だと言うことです。「悔い改め」の心が無いと言って、自分の過去犯した罪をあげつらうことは、聖書における「悔い改め」とは無関係だ、ということです。ギリシャ語「metanoe:wo」で訳したのに若干無理があったのかもしれません。なお、ギリシャ語「metanoe:wo」にも「悔いる」という意味あいも薄く、むしろ「考え直す」「心を改める」という意味です。日本語でなじみやすい言葉で言えば「改心」です。「改心して福音を信ぜよ」です。

5節の「預言者たちは永遠に生きているだろうか」というところはいろんな解釈があるようですが“預言者も生きて我々に勧告するまではできないのだ”という逆説的に解釈することができます。ゼカリヤ書は各種預言書の最後の方ですが、ここで預言者として念頭に在るのはエレミヤであろうと想像できます。エレミヤ書と類似の表現が多数みられるからです。そのエレミヤも、もういない。ゼカリヤの先祖たちはエレミヤの声を忘れ、主なる神以外の力を信ずるようになっていった、ということです。6節では預言者のことばとおきてがゼカリヤの先祖たち即ちユダの人々にせまっていたのに、これを聞かなかった。それで彼らははったと気づき「万軍の主は、私たちの行いとわざに応じて、私たちにしようと考えられたとおりを、私たちにされた」と告白しています。これ以下で幻の記述が始まりますが、ゼカリヤ書は冒頭で、“これからのべる幻を考える中で、主なる神が、あなた達が悔い改め神の義に立ち帰ることを求めている”ということです。

1:7より８つの幻が述べられます。それぞれの幻が旧約聖書のなかでの歴史を背後に於いて記述され、興味深いものです。お渡ししました、概要のなかに数字を書いておきました。８つの幻とは「神の巡察使たち」、「四つの角と四人の職人」、「エルサレムの未来の栄光」、「大祭司の復職」、「燭台と尽きない油」、「空飛ぶのろい」、「エパ枡の中の罪悪」、「主の遠征隊」の8つです。一点、幻の構成について指摘しておきます。実はこれら８つの幻を比較すると、第一と第八、第二・第三が第六・第七と、第四と第五がそれぞれ類似性をもって配列されています。これは並行法と言い、文書作成の技巧の一つです。ゼカリヤ書には他に交差並行法と言われる技法もつかわれています。かなりねりあげられた文書といえるでしょう。この対応関係で、ひつだけ見てみます。第一の幻は1:8で「ひとりの人が赤い馬に乗っていた。その人は谷底にあるミルトスの木の間に立っていた。彼のうしろに、赤や、栗毛や、白い馬がいた」とありますが第八の幻は6:2-3で「第一の戦車は赤い馬が、第二の戦車は黒い馬が、/第三の戦車は白い馬が、第四の戦車はまだら毛の強い馬が引いていた」と言われています。赤い馬、白い馬が共通した幻です。

８つの幻は神殿再建を通して、イスラエル、エルサレムの回復をすることであり、イスラエルの民族的自立を志向したものと言えるでしょう。これが、ペルシャからの独立を企てている、としてペルシャ王への讒訴に繋がったのかもしれません。簡単に要約します。第一の幻は赤い馬や、白い馬に乗った「神の巡察使」の幻ですが、これは、神殿再建をやろうとしている帰還のユダヤ人は神の守りの中にあり、神の使者が巡回していてくれている、ということを意味しています。神の使者は「私たちは地を行き巡りましたが、まさに、全地は安らかで、穏やかでした。」 と言っています。そして、神は「わたしは、エルサレムとシオンを、ねたむほど激しく愛した。」とまで言っています。1:17では「『わたしの町々には、再び良いものが散り乱れる。主は、再びシオンを慰め、エルサレムを再び選ぶ。』」 との宣言がなされています。エルサレムと神殿のあるシオンの回復です。

第二の幻は「四つの角と四人の職人」です。四つの国という表現はダニエル書にも出てきますが、王朝の変遷を指しています。角はそれらの国の王です。四つの角はアッシリヤ、バビロニア、エジプト、ペルシャの王のことだと思われます。これらの国の王が「ユダとイスラエルとエルサレムを散らした角だ」というのです。四人の職人はこれらの国々を滅ぼすために神が遣わした使者だという訳です。これは対ペルシャの関係では微妙な政治的意味をもっています。言論の自由などない時代です。ゼカリヤに聞いたら、アッシリヤ、メディヤ、バビロニア、エジプトのことだと言って言い訳するのかもしれません。2章に入って、第三の幻は「エルサレムの未来と栄光」の幻です。後で少々、中に入り込んでお話します。第四の幻は「大祭司の復職」です。大祭司ヨシュアはゼルバベルとともに、神殿再建に努めた人物ですが、サタンと称せられている人々からの讒訴によって失脚の憂き目にあったのだと思われます。その汚れた服を着たヨシュアを主が復権し、新しい礼服を着せました。ヨシュアにも揚げ足をとられるようななにかがあったのでしょう。主の使いは「主の道に歩み、主の戒めを守る」よう命じられます。そして3:8で「あなたとあなたの前にすわっているあなたの同僚たちは、しるしとなる人々だ。見よ。わたしは、わたしのしもべ、一つの若枝を来させる。」という約束を与えられます。「若枝」はイザヤ以来、イスラエルを救う者を指しています。この「若枝」は神殿再建のリーダーである総督ゼルバベルのことを指している、という解釈もありますが、もっと広い意味で、将来出現する「メシア」を指している、と考えるべきではないか、と思います。この神殿再建の時代から、所謂「メシア思想」がユダ族のなかで大きく成長して行った、と考えられます。

第五の幻は4章です。「燭台と尽きない油」の幻です。燭台には七つのともしび皿が付いています。この燭台はメノーラーと言い、今でもユダヤ教の式典で使用されます。現代イスラエル国家のエンブレム・国章にもなっています。キリスト教にも入って来て、クリスマスの前、待降節でローソクに順番に火をつけて使います。救い主を待つ、象徴なのかもしれません。このメノーラーの左右にオリーブの木がある、という情景です。これはゼルバベルへの主のメッセージだというのです。即ち、『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』 ことを行え、というのです。‎ヘブル語で読みますと「lo behai:l welo bekoaha ki: im beru:hi」となり、韻を踏んだような音になっています。要するに人間の力にたよらず主の霊によりたのめ、というのです。これぞ、信仰者の平和主義です。これは9:10の「救い主の平和」に繋がっています。そして二本のオリーブは4:14で「これらは、全地の主のそばに立つ、ふたりの油そそがれた者だ。」との説き証しがされています。これは総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアを指します。「油注がれた者」の原語は「itshar」で、文字通りにはオリーブ・オイルのことです。神の権威によって王や祭司に任命された者です。ゼルバベルやヨシュアは当時の帰還のユダヤ人にとっては希望の星だったのです。なお、この言葉は所謂「メシヤ」である救い主とは違うことばです。しかし、ゼルバベルは反乱容疑でペルシャによって処刑された、と推測されています。もしかしたらイスラエル独立運動の計画があったのかもしれません。この悲劇的なダビデ王の末裔は第二イザヤの「苦難の僕（しもべ）」の原型かもしれない、といわれています。マタイ1章の主イエスの系図にも名を残しています。

第六は5:1-4までで「空飛ぶのろい」の幻です。20キュビット、10キュビットですから、長さ10m、5mの大きな巻物が空を飛んでいるのを見た、と言っています。ユダヤ人にとってみて巻物といえば律法を指します。ユダヤ人が守るべき事柄が記載されているものです。それが「のろい」だといわれているので、当時の世の中が、全くこれに反していた、ということを暗示しています。そのため、これによって裁かれる、ということです。「のろい」には「qa:lal」と「a:rar」の二種類の言葉があります。日本語の「のろい」は呪術的意味が強いですが、ヘブル語では「a:rar」であってここで使用されている「qa:lal」ではありません。ここの「のろい」「qa:lal」は「神の祝福が全くない」という信仰的意味です。災厄ばかりにみまわれることです。社会の指導者たちは、そしてあろうことか、主の名を使って偽りを言っている、というのです。最も大きな罪です。そして裁かれます。5節から5章の最後までは「エパ枡の中の罪悪」の幻です。第七の幻です。エパは容量の単位で、1エパが23リットルですのでエパ枡は大変大きな枡です。エパ枡の中に2人の女がいてそれに鉛のふたをしたが、それでも二人は出てきた、といわれています。その女たちには翼があり、エパ枡を「シヌアルの地」即ち大バビロンに持っていくと言うのです。大バビロンに神殿を建て、そこにエパ枡を安置する、というのです。エパ枡は悪がいっぱいつまったいれものですから、サタンの使いである、この2人の女がごっそりと悪を持ち去る、と言っているのです。大バビロンは黙示録17:5で悪霊の住処（すみか）とされています。悪のバビロン捕囚です。エルサレム神殿が再建されるとサタンはいたたまれなくなり、バビロンに移る、と言うのです。そしてエルサレムは聖なる地になります。

最後の第八の幻は「主の遠征隊」であり、第一の幻「神の巡察使」に対応します。四つの戦車を「赤い馬」「黒い馬」「白い馬」「まだら毛の強い馬」が引いています。四方を巡り、罪ある者たちを裁きます。特に、黒い馬は強い馬であり北に行き、神の怒りの対象を打ち砕きます。「北」といえばアッシリアの地ですが、ここではバビロンを指しているようです。自分たちが捕らわれていたバビロンは異教の地であり神の怒りを買っているので神の使者がこれを滅ぼす、と言っているのです。これは、いまだバビロンに残っている多くのユダヤ人にエルサレムに帰還し神殿再建に協力するように促すものでもあったろう、と思われます。

先程保留しておいた第三の幻は我々新約の民にとっても大きく関連する幻です。2:1-13即ち2章全体が「エルサレムの未来の栄光」と題された幻です。エルサレムの寿命は測定され、滅びの憂き目にあいます。しかし、8節で「主の栄光が、あなたがたを略奪した国々に私を遣わして後、万軍の主はこう仰せられる。『あなたがたに触れる者は、わたしのひとみに触れる者だ』」とまで言われています。エルサレムは主なる神の瞳に譬えられているのです。そして10-11節では「シオンの娘よ。喜び歌え。楽しめ。見よ。わたしは来て、あなたのただ中に住む。－－主の御告げ－－ /その日、多くの国々が主につき、彼らはわたしの民となり、わたしはあなたのただ中に住む。あなたは、万軍の主が私をあなたに遣わされたことを知ろう」と言われています。シオンの娘というのはエルサレムの人々であり、ひいてはイスラエルの信仰者です。この表現は後ほど9:9にも出てきます。「シオンの娘よ、大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫び」とあります。またユダ王国末期の預言者ゼパニヤ書にもでてきます。3:14です。「シオンの娘よ。喜び歌え。 イスラエルよ。喜び叫べ。 エルサレムの娘よ。心の底から、喜び勝ち誇れ」とあります。ゼパニヤ書の表現がゼカリヤ書で使用された、と考えるべきでしょう。10節と11節では主なる神が「あなたのただ中に住む」とまで言われています。2度繰り返されています。主なる神が共に居る、私の中に宿るから喜ぶのです。これこそ「インマヌエル」です。ゼパニア書の表現やゼカリヤ書9章の表現は「喜べ」に加え「喜び叫び」とか「喜び歌え」「喜び勝ち誇れ」という言葉も同時に使用されています。変な言い方かもしれませんがキチガイじみた喜びです。ここで思い出すのはピリピ人への手紙です。4:4で「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい」とあります。これらをみるとヘブル語で「喜ぶ」に関連する語の勢揃い、といえます。「喜び叫ぶ」という意味の「ra:nan」、通常の「喜ぶ」という意味の「sa:maha」、やはり「喜ぶ」の意味で登場する「ga:yal」、通常は「叫ぶ」という意味の「ru:a:」です。主なる神にあっての喜びです。また13節で「主の前で静まれ」とあり、用意が整い、主なる神が顕現します。私たちにとっての主の顕現は主イエスの誕生、即ちクリスマスです。

第四の幻のところで「若枝」という表現が出てきますが、「八つの幻」の終わったすぐの所である6:9-15節には再度「若枝」が出てきます。12-13節をお読みします。「彼にこう言え。『万軍の主はこう仰せられる。見よ。ひとりの人がいる。その名は若枝。彼のいる所から芽を出し、主の神殿を建て直す』。彼は主の神殿を建て、彼は尊厳を帯び、その王座に着いて支配する。その王座のかたわらに、ひとりの祭司がいて、このふたりの間には平和の一致がある。』 」とあります。おそらくゼルバベル、ヨシュアに対応するふたりが幻として現れているのだと思われます。幻として現れた二人について語られているのであり、天的存在です。地上の人間ではありません。二人の幻の内一方は「若枝」ですから救い主メシアです。12節に「見よ。一人の人」という表現がでてきます。これは後にラテン語で「エケ・ホモ」即ち「見よこの人を」となった言葉です。「見よこの人を」はヨハネ福音書19:5でポンテオ・ピラトがユダヤ人に主イエスを引き渡す時に発した言葉です。新改訳聖書では「さあ、この人です」と訳されていますが口語訳では「見よ、この人だ」と訳されています。ギリシャ語原本を直訳すると「見よ、この人」でありヘブル語訳も「見よ、この人」です。ローマ・カソリックはゼカリヤ書のこの部分はイエス。キリストの預言としてきたため、「エケ・ホモ」という表現を大切にしてきたのです。エルサレムに「エケ・ホモ」教会というのがあります。由木先生の作られた歌詞で「まぶねのなかに」というクリスマスの讃美歌がありますが、その歌詞のなかで「この人を見よ」が繰り返されています。

　7章、8章は「新時代の曙光（あけぼの）」と言われ、エルサレムへの裁きと復興について描写している箇所です。心に留め置くべき言葉のみお読みします。7:9-11です。「万軍の主はこう仰せられる。「正しいさばきを行い、互いに誠実を尽くし、あわれみ合え。/やもめ、みなしご、在留異国人、貧しい者をしいたげるな。互いに心の中で悪をたくらむな。」/それなのに、彼らはこれを聞こうともせず、肩を怒らし、耳をふさいで聞き入れなかった」とあります。神の義の要約が述べられています。このまま主イエスの御言葉に繋がって行きます。「神の義」即ち「公正」が実現されている社会はこれら、最も弱き者達が大切に扱われる社会です。これらの者たちがどう扱われているかでその社会の「公正」さがわかります。8:19には「真実と平和を愛せよ」という言葉が出てきます。神の国を最も短く表現するとなると、この表現が最適かもしれません。「真実と平和」です。ヘブル語では「emetとshalo:m」、ギリシャ語では「ale:teiaとeilehne:」です。英語では「truthとpeace」です。8:7-8では「万軍の主はこう仰せられる。「見よ。わたしは、わたしの民を日の出る地と日の入る地から救い、/彼らを連れ帰り、エルサレムの中に住ませる。このとき、彼らはわたしの民となり、わたしは真実と正義をもって彼らの神となる」と言っています。ここでも「真実と正義」です。そして「人々は主なる神の民となり、主なる神はこれらの人々の神となる」と言われています。これは「インマヌエル＝神我らと共にあり」の究極的表現です。この定型表現がされている箇所を2箇所だけお読みします。エレミヤ書24:7「また、わたしは彼らに、わたしが主であることを知る心を与える。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らが心を尽くしてわたしに立ち返るからである。」とあります。新約では、ヘブル書8:10「それらの日の後、わたしが、 イスラエルの家と結ぶ契約は、これであると、 主が言われる。 わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつける。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」とあります。

　9章からはそれまでと打って変わった表現形態になります。詩文です。通常1章から8章までを第一部、9章以降を第二部と読んでいます。また9章から11章までを第二ゼカリヤ書、12章以降を第三ゼカリア書と言っています。第二ゼカリア書は「王なるメシア」の描写が主たる内容です。

9-10節は当初お読みした聖書箇所の2番目の箇所です。9節はゼパニヤ書3:14-15とほぼ同じ表現です。シオンの娘、エルサレムの娘が両方出てくる節を探しますと、預言書以外では第二列王記19:21に在ります。「主が彼について語られたことばは次のとおりである。 処女であるシオンの娘は あなたをさげすみ、あなたをあざける。 エルサレムの娘は あなたのうしろで、頭を振る」とあります。これはアッシリア王セナケリブに告げられた主の言葉であり、その夜アッシリア軍は主の使いに大敗致します。これは預言者イザヤがヒゼキヤ王に示した預言です。シオンの娘は処女である結婚前の女性、エルサレムの娘は結婚後の若い女性を指しているようです。ヘブル語では町は女性形ですからこのような表現がされたのでしょう。そしてこの救いを齎す方は「柔和で、ろばに乗られる。それも雌ろばの子の子ろばに」と言われています。申命記17:16では「王は、---馬を多く増やしてはならない」と言われています。また第二サムエル記16:2でサムエルがエルサレムから逃れる時「二頭のろばは王の家族がお乗りになるため」として提供されています。おそらく馬は戦闘行為を想起させるので平和の君としての王はろばに乗ってくる、と信じられていたのでしょう。「雌ろばの子の子ろば」とは掛け合わせでできたラバではなく純粋のろばである、という意味です。「柔和」という部分は「へりくだり」とも訳すことができます。10節では平和が一帯を覆うことが述べられています。エフライムはかつての北王国イスラエルを象徴して言う言葉です。この軍備否定即ち戦争放棄はミカ、イザヤの伝統です。聖なる戦争即ち聖戦により純潔なヤハヴェ信仰集団としてのイスラエルを形成する神の試みは成功しませんでした。預言者はその原因はイスラエルの罪即ち偶像や自らの力に頼ろうとするところにあることを見抜き、真の主の民の共同体は戦いを全面的に止め、神の国は、贖いの主の来臨によってのみ成し遂げられることを宣言した、と言うべきでしょう。ミカ書4:3の一部をお読みします。「彼らはその剣を鋤に、 その槍をかまに打ち直し、 国は国に向かって剣を上げず、 二度と戦いのことを習わない」とあります。要するに軍隊を持たない、ということです。戦争の放棄は軍隊の放棄によって保証されます。あればつかうことになります。憲法9条の戦争放棄条項はこの真実に基づいています。世界四位の軍事費を費やしている現在の自衛隊が軍隊でない、というようなごまかしは世界では通用しません。平和主義国家が泣いています。戦争は支配欲という人間の本性から発していることですから、これをやめる、というためには、断固たる明確な規範が必要なのです。9条は警察権の範囲でしか国家の実力行動は認めていません。いいかげんにしろ、と言いたくなります。子供に9条を読ませた方がまともな解釈をするでしょう。今の政権は政策が正しいかどうか以前に「ごまかし」の大量生産であり、世界のはじさらしです。

　9:11-11章の終わりまでは王なるメシアに関する各種の記述です。若干のことばの説明だけ致します。9:13の「ヤワン」とはギリシャ人のことです。ここでギリシャ人が攻めて来る、と言われていますが、アレクサンダー大王の予言と解釈されています。事後預言だと思われますが、第二ゼカリアの時代でもギリシャの勢力が強くなる、ということが予想されていたのだと思います。後の、ヘレニズム文化を強制したセレウコス朝シリアに関する預言とみることもできます。10:6に「ユダの家、ヨセフの家」と出てきますが「ヨセフの家」は嘗ての北王国のことです。即ち両者あわせて嘗てのイスラエルになります。7-8節で神の祝福が示されています。「エフライムは勇士のようになり、 その心はぶどう酒に酔ったように喜ぶ。 彼らの子らは見て喜び、 その心は主にあって大いに楽しむ。/わたしは彼らに合図して、彼らを集める。 わたしが彼らを贖ったからだ。 彼らは以前のように数がふえる」とあります。11章に入ると「バシャンの樫の木」と言う表現があります。バシャンはガリラヤ湖の北東の地域で豊かな実りを生む農業地帯です。11:7に二本の杖即ち「慈愛」と「結合」と名付けられた羊の群れができます。「慈愛」と訳されているのはヘブル語で「no:am」ですが本来は「喜び」「親切」という意味で口語訳では「恵み」と訳されています。こちらの訳の方が妥当かもしれません。結合、は「hohiru:m」で「ユニオン」の意味です。神の指導力によってもたらされる結合、即ち南北分裂王国の結合を象徴している、と考えられます。しかし、15節以降に登場する愚かな牧者によって救いの道が失われます。

　12章、13章は「主の日」についてです。第三ゼカリヤ書と呼ばれています。まず、エルサレム包囲による苦難があり、12:12-14節に典型的な嘆きの詩が歌われます。「ひとり嘆く」が定型的に繰り返されます。ナタンはダビデの子、シムイはレビの子です。「嘆き」というのは旧約聖書のテーマの一つです。特に詩篇ではメイン・テーマと言っても良いと思います。ここで使われている「嘆く」という言葉は「sa:fad」という言葉ですが、その他「e:bel」「mispe:d」などがありますが少しづつニュアンスが異なります。「悲しみ歌う」と言う意味の「qi:n」と言う言葉がありますがその名詞形「ki:nah」が「嘆き」の意味で多く使われます。エゼキエル書に多く登場します。2:10をお読みします。「それが私の前で広げられると、その表にも裏にも字が書いてあって、哀歌と、嘆きと、悲しみとがそれに書いてあった。」とあります。幻のなかでの巻物に書かれていたことです。意味としては慨嘆の時の「ああ」という間投詞も「嘆き」の象徴として使われます。この言葉はエレミヤ哀歌の最初の言葉であり、ユダヤ人聖書において「エレミヤ哀歌」の題名にもなっています。旧約聖書の「嘆き」は神への祈りであり、裏には神が必ず慰めを与えてくれる、という信仰心があります。ゼカリヤ書の「嘆く」「sa:fad」は最も普通に使われる「嘆き」の言葉です。日本語では「嘆く」が繰り返されていますが、実は最初に「嘆く」の言葉が出てきて、あとは「ひとり・alone」が繰り返されているだけです。注意したいのは、この嘆きの詩の直前のところ12:10は「苦難の僕」を暗示しているのではないかと言われている、ところです。それを前提に「嘆きの詩」をみると、これは「苦難の僕」の嘆きとみることもできると言うことです。そもそも、「苦難の僕」はメシア思想としては全くの邪道ですから、その系譜がこの第二ゼカリアにあるとせば、主イエスの似姿としての「苦難の僕」の理解に大いに近づきます。

13章に入っても「汚れの除去」についてや「打たれる牧者」の描写が続きます。8節、9節をみると“2/3が断たれ、そして1/3が鍛えられる。そして主の名を呼ぶと主は答えられる”と言っています。最後に神とイスラエルの民の関係修復がなります。“私の民、私の神”の関係が回復されると言っています。「インマヌエル」の関係の回復です。

　14章でやっと主の日の希望の面が描かれます。2節で大いなる困難があっても「残りの民」が町にいる、と言います。4節では主の足がオリーブ山の上に立つ、と言います。シオンの丘は敵の手に在るので、神はオリーブの山に降り立ったのでしょう。「真中で二つに裂け」と言っていることから見ると地震の発生でしょう。5節によればユダの王ウジヤの時に地震があったようです。BC783-750がウジヤ別名アザリヤの治世ですからゼカリヤの250年前くらいの話です。すっと記憶されていたのですから、かなり大きな地震であった、と考えられます。アモス書1:1にも「これはユダの王ウジヤの時代、イスラエルの王、ヨアシュの子ヤロブアムの時代、地震の二年前に、イスラエルについて彼が見たものである。」とあります。イスラエルの地も地震は起きやすい地域ですが、日本とは比較になりません。日本は地震の地脈の上に国があるみたいなもので、どこで起きるかわかりません。あの福島事故を経験して、まだ再稼働などと言っているのですから、世界の人々はあきれているでしょう。カソリック教会が原発廃止で良い働きをしています。新約聖書では地震は終わりの日の前兆と理解されているようです。私は、そこまで言いはしませんが、少なくとも、神様の人間に対する、何かの警告である、と思います。原発は人間の力に対する過大期待に根拠を置いています。

そして主が来られます。「聖徒たち」も共に来ます。ここでの「聖徒」は天使のような者たちのことであり、天的な存在です。「聖徒」という言葉は文字通りには「聖なる者」、ということであり、そもそもは神様の呼称でした。旧約の時代に適用範囲が変化してゆき、神の使者、天使のような存在を指して使用されるようになりました。しかし、例外的にエリシャのような預言者を神の使者と同様な者としてこの言葉を適用することがありました。これがBC2cのマッカビーの反乱の頃には迫害の中、神殿祭儀を守ろうとする敬虔な人々も「聖徒」に加えられるようになりました。そして、新約の時代には主の使徒を主（おも）に指す言葉となり、現代ではキリスト者全般を指して使う言葉にまで拡大使用されています。こう考えるとあまり気安く「聖徒」という言葉を使用することはできませんし、また使用する時は真（まこと）の信仰の心を持って使用すべきであろう、と思われます。黒人霊歌で「聖者の行進」と言う曲がありました。そもそもは葬儀の曲だったようです。10節ではこのエデンの園の回復のようなエルサレムについて描写が進みます。10節のゲバはエルサレムの北方、リモンはエルサレム南方の町で結局エルサレム一帯のことを指します。アラバは「平地」の意味でエルサレムは丘ですのでそれに対し生活しやすい平地を描いたのでしょう。ベニヤミンの門などはエルサレムの地名です。ハナヌエルのやぐらとか隅の門というのはエレミヤ書31:38にもでてきます。11節の「絶滅」の言葉は注意に値します。これは「he:rem」という名詞ですがそもそもは「ha:ram」という「聖絶する」という意味の動詞です。これはヨシュア記等にでてくる、神の名に置いて絶滅させる、乃至は殺して神に奉納する、と言う意味の言葉です。この14:11でエルサレムではこの聖絶はもはや起きない、と言われています。エルサレムという名は「平和の町」の意味ですから、人々が「安らかに住む」ようになる、というのです。12-15節でエルサレムに攻め上るすべての国々が災害に見舞われます。互いに滅ぼしあいます。

　そして遂にエルサレムの完全回復がなされます。16節に「仮庵の祭り」があります。太陽暦では9月末から10月半ばにかけて行われる秋の収穫祭です。仮庵の祭りと言われるのは出エジプトの40年の旅で仮庵に住んだことを思い起こさせるためです。17-19節で仮庵の祭りに参加しない民族には神の罰が下される、と言われています。エジプトはその代表格です。この部分はプトレマイオス朝エジプトが復興してから書かれたのかもしれません。もしそうだとすればBC4-3cのことです。20節に「主への聖なるもの」という表現がでてきます。この言葉は出エジプト記28:36と48:14にでてきます。主なる神に捧げられた特別なもの、ということの徴（しるし）です。そして21節では主の宮の中のなべがこの「主への聖なるもの」になる、といわれています。なべは日常用具であり俗なるものの典型ですがここでは「主への聖なるもの」とされています。新しいイスラエルの下では世俗の区別は意味を持たず、すべてが聖なるものとして扱われる、という事でしょう。この世の職業を神からの召命と理解するプロテスタント信仰もこれに通ずるところがあるかもしれません。とにもかくにも「主への聖なるもの」とされたなべで、食物を煮るようになる、といわれています。最後の「万軍の主の宮にはもう商人がいなくなる」というのは面白い表現です。文字通りには「カナン人」という表現です。イザヤ書23:8でカナン人と商人を同一視して、その商人を強く批判しています。カナン人は努力も払わず、かすめ取って豊かになった姑息な商人だ、という訳です。ゼカリヤ書14:21ではもはやそのような者どもはいない、と宣言しています。思い出されるのは主イエスの宮清めです。いつも“なぜイエス様はこのようなひどい事をされたのか”と気になっていましたが、カナン人の土着信仰、日本で言えば「おふだ」、のようなものを扱っていた宮の商人達に、イスラエル信仰の純潔さを知らしめる必要があったのでしょう。ホセア書12:7に「商人は手に欺きのはかりを持ち、しいたげることを好む」とあるように、カナン商人は、決して良くは思われていなかったようです。

　このようなイスラエルの救いの完成は「主の日」に起きることです。「主の日」即ち「終わりの日」の描写は聖書のあちこちにあります。ゼカリヤ書14:1-21、マタイ福音書24:15-44、マルコ福音書13:14-33、ルカ21:8-28、ヨハネ黙示録20:7-15を比較するといろいろ興味深いことが解ります。その他、小預言書にも多数あります。自然災害が前兆として現れる、と言う点はほぼ共通しています。そのため、自然災害が続くと必ず「終末は近い」という話がでてきます。神の警告を無視するのは大いなる罪ですが、いついつ地球の終わりが来る、というような話に振り回されるのもどうかと思います。

アメリカのキリスト教の一派には黙示録の解釈を通して、現在の国際政治情勢にあてはめ、「イスラエルの回復」の日が近い、としてイスラエル国家の軍事行動を擁護している勢力があります。イスラエル軍が今、やっていることを見て、主イエスはそれを支持するはずがありません。どっかで理屈がおかしくなっています。この人々がキリスト教福音派と称せられているのですから日本の福音派としてたまったものではありません。メシアニック・ジューと称せられる主イエスをメシアと認めるユダヤ人がアメリカにはかなりいます。イスラエルにも居て、パレスチナとの共存を目指しています。こちらの方がずっと旧約・預言者の伝統に忠実だと思います。彼らは、今のイスラエル国家を聖書で言うイスラエルの回復とは認めて居ません。当たり前です。アメリカの力が弱まって行った先にはアラブ諸国のイスラエルに対する報復が待っています。再びホロコーストが起きます。もしかしたら、回避できないかもしれません。おそらく、イスラエルは核兵器を使用するでしょう。大変なことになります。黙示録の解釈はあまり理論的にスッキリさせようとすると道を踏み外します。

　最後に、ゼカリヤ書に出てくるメシア表現と見做されている箇所をまとめて見てみたいと思います。メシア思想の由来を見る時に根本的な問題があります。それは、ユダヤ教の中で培われたメシア思想は基本的には王的メシアです。散らされた民を再び集め、異教の民を滅ぼし、イスラエルの栄光を再び輝かし、エルサレムを復興し、他国を支配するダビデの王国の復活をもたらす偉大な指導者、というイメージです。しかし、主イエスはそのようなメシアではありませんでした。むしろイザヤ書53章に示された「苦難の僕」の道を歩まれました。軍事的、政治的に強力な指導力をもったメシアではなく、ある意味では弱く、嘲られ、最後は、十字架刑にあって、無力な中、殺されるという結末となった人物です。その「苦難の僕」が復活し、弟子たちに「福音の証人」となるよう諭されたのです。ユダヤ人のメシア待望者からみると失望を感ずるのは当然です。では、「苦難の僕」である「救い主」メシアというのは旧約のなかでイザヤ書にのみ現れる孤立したことなのでしょうか。BC5cと推測される第二イザヤ書における「苦難の僕」が突如として主イエスにおいて現実化したのでしょうか。その一つの手がかりがこのゼカリヤ書におけるメシア預言と言われている箇所です。極めて解釈のむずかしい箇所もありますが、見てみましょう。少なくとも偉大な王たるメシアのイメージではないことがわかるでしょう。

まず最初は、9:9の「柔和で、ロバに乗ってこられる」救い主です。この箇所はマタイ福音書21:5で引用されています。「シオンの娘に伝えなさい。 『見よ。あなたの王があなたのところに来られる。 柔和で、ろばの背に乗って、 それも、荷物を運ぶろばの子に乗って。』」とあります。ろば、は働き者の象徴とされていましたから、そんな理由から「荷物を運ぶ」という言葉が付加されたのだと思います。力強い王たるメシアでもなく、直接的には「苦難の僕」のように十字架を負うメシアでもありません。この次の節が軍事力放棄のメッセージであることとあわせて考えると、「平和の君」としてのメシアということができましょう。

次は11:13です。「主は私に仰せられた。「彼らによってわたしが値積もりされた尊い価を、陶器師に投げ与えよ。」そこで、私は銀三十を取り、それを主の宮の陶器師に投げ与えた。」とあります。この部分はマタイ27:9でユダの裏切りに関連して引用されています。銀三十というのは贖いの対価です。出エジプト21:32に「もしその牛が、男奴隷、あるいは女奴隷を突いたなら、牛の持ち主はその奴隷の主人に銀貨三十シェケルを支払い、その牛は石で打ち殺されなければならない。」とあります。「そのとき、預言者エレミヤを通して言われた事が成就した。「彼らは銀貨三十枚を取った。イスラエルの人々に値積もりされた人の値段である」とあります。マタイはエレミヤ書と言っていますがエレミヤ書とゼカリア書のミックスのような引用であり、言葉だけから見ればゼカリヤ書の表現に近いと思います。ゼカリヤ書11章は「偽りの牧者」について書いているようですが超難解な箇所です。11:4で神がゼカリヤに言います。「ほふるための羊の群れを養え」です。殺すための羊、民を牧せよ、とゼカリヤに命じているのです。そしてゼカリヤは牧者の道具の二本の杖に「慈愛」と「結合」の名をつけて、その二つとも折ってしまいます。最後は、神はゼカリヤに「能無しの牧者」になれと命じ、彼は剣で撃たれ、腕はなえ、目は見えなくなる、といわれています。このような表現は極めて逆説的な表現ですが、民を牧する者が銀三十で裏切られ、剣で破滅させられる、ということを言っているようです。これを神がゼカリヤに愚かな牧者となり、自分を破滅するように民を追いこめ、と言っているようです。これは「苦難の僕」を邪悪な者のわざとみたてたようなものです。強烈な皮肉です。

三つ目のメシア表現は12:10です。「わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。」とあります。一見メシアとは無関係のようにみえますがポイントは「自分たちが突き刺した者」というところです。イスラエルの民は、主からの恵みと憐みを受けて居ながら、その主を「突き刺して」しまい、後に、激しく泣く結果になる、ということを言っているのです。新共同訳が割合解りやすいと思います。「わたしはダビデの家とエルサレムの住民に、憐れみと祈りの霊を注ぐ。彼らは、彼ら自らが刺し貫いた者であるわたしを見つめ、独り子を失ったように嘆き、初子の死を悲しむように悲しむ。」と訳されています。鈴木佳秀教授の訳では「そしてわたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に恵みと祈りの霊を注ぐ。彼らは自分たちが刺し貫いた者のことでわたしを仰ぎ見て、独り子（の死）を悼むように嘆き悲しみ、初子（の死）を悼むように激しく泣き叫ぶ。」となっており、民が刺し貫いた者、のことである点が明白にされています。新約聖書ヨハネ19:36-37で引用されています。「この事が起こったのは、「彼の骨は一つも砕かれない」という聖書のことばが成就するためであった。また聖書の別のところには、「彼らは自分たちが突き刺した方を見る」と言われているからである。」と記されています。十字架上の主イエスを兵士が槍で「突き刺す」場面です。これも「苦難の僕」の一面を指し示しています。この表現の後に、例の「嘆きの詩」が現れるのです。そして13章に入り、聖化のプロセスが始まるのです。

その他、救い主、メシアを暗示している箇所はいくつかあります。「油注がれた者」「若枝」「ひとりの人・エッケホモ」などです。ゼカリア書が旧約と新約をつなぐ文書とみなされた理由もこの書が「メシア」思想醸成の途上を示しているからだろうと思います。

　今までの、十二小預言書には裁きの面が強く出ていて、心が圧迫されるものが多かったのですが、ゼカリヤ書は裁きと祝福が混在しており、両者が織りなされて登場するような感触があります。難解な文書ではありますが、ダニエル書、黙示録など他の文書と比較しながら想像力を働かせればより深い理解に到達できるでしょう。しかし、注意しなければならないのは現代の社会への粗雑な適用でオカルト的な道に入り込むのを避けるべきです。救いの希望というイスラエル信仰の深いところでの連続性を見るように致しましょう。祈ります。

（ご在天の主なる御神様、この学びの時を感謝致します。ゼカリヤの壮大な救いの幻が神の子の贖罪の犠牲による救いへと至る、イスラエルの救済史のなかに私たちを置いて下さりありがとうございます。単なる字句上での預言の成就との理解ではなく、イスラエルの歴史の底流に流れる主なる神の救済の業としてのイエス・キリストを仰ぐ信仰をお与えください。私たちがその僕として謙虚に、しかし勇気をもってこの世の営みに向かうことができるよう、知恵と力と勇気をお与えください。我らの救い主、イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン）